

戦争が遠い過去になる今

遺品から戦争の真実を語り伝える取り組みを

— 被害だけではなく加害者としての認識を忘れてはならない —

戦争は国と国の争い。当然、相手から被害を受けるとともに、相手に被害を与える。戦争は、被害者にもなり加害者にもなる。

でも、被害ばかりを強調すれば「被害者意識」だけが育っていく。それでは、加害者としての意識が育たない。戦争と平和について考えるとき、この被害者の立場と加害者の立場をバランスよく学習することが、とても大事です。

今回は、福岡県小竹町のある一市民の方が運営なさっている、遺品等を扱った「戦争資料館」をご紹介します。

訪問したのは、福岡県の小竹町御徳にある「**兵士・庶民の戦争資料館**」です。現在の館長の武富慈海（たけとみじゅかい）さんのお父さんである武富登巳男さんが設立し、1979年から2002年まで初代館長を務められました。

登巳男さんが亡くなられた後、妻の智子さんが2代目館長として引き継ぎ、その後息子の慈海が3代目館長となり現在に至っています。その慈海さんの著書『ふれてください戦争に』には、初代館長の登巳男さんがこの資料館をあえて平和資料館とせず「戦争資料館」としてわけを、次のように書かれています。

—わが国は中国とは15年戦争をした。多くの苦痛を与えている。米、英、蘭、仏と戦ったがそれぞれの国の植民地また勢力圏の国でその住民に災難を与えている。戦火に追われる悲惨、無情は体験者でなくてはわからない。加害者としての認識が必要である—と。

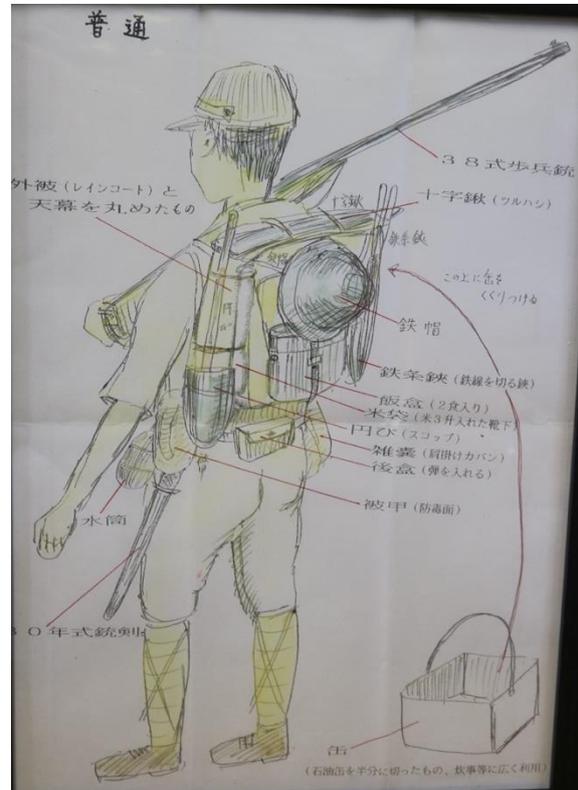
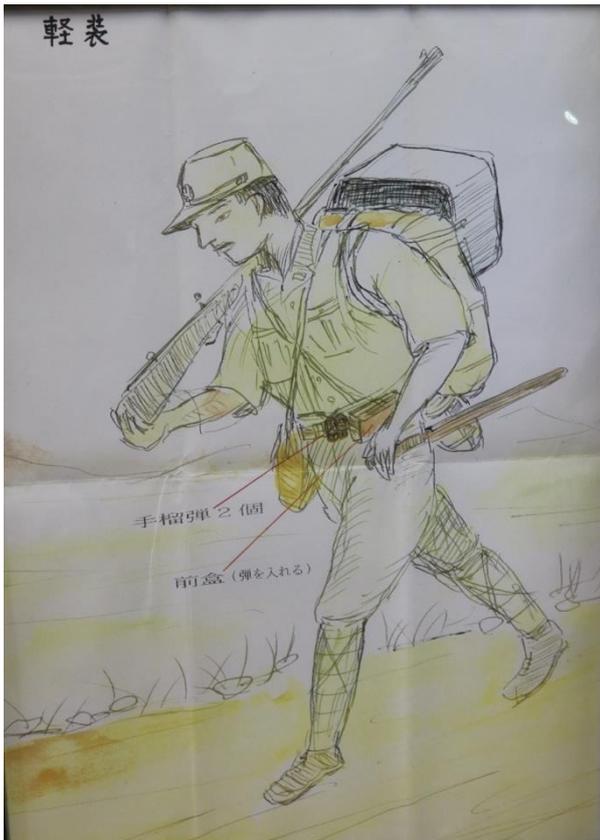
今回2日間資料館を訪れ、さまざまなお話を聞かせていただきました。そこに飾られていた遺品や資料は、全て手にとって触って感じることができます。一般の資料館のようにガラスケース越しに眺めるのではなく、その重さや手触り、匂いや色全てを間近に見ることができます。軍服も着れば軍靴も履けます。読んだり眺めたりするだけではわからない、戦争の実相が見えてくる感じがします。

一部しかご紹介できませんが、もし興味を持たれたら一度足を運んでいただきたいと思います。入館は無料です。事前に予約の連絡を入れておくと良いです。

<兵士・庶民の戦争資料館>

福岡市鞍手郡小竹町御徳 415-7 電話 0949-62-8565





兵士の装備

↑2日で100 kmも歩いて移動する。暑く雨の多い地域、起伏の激しい山岳地帯…。平坦な道ばかりを歩くわけではない。生きるための装備、戦うための装備 30~40 kgを身につけての移動。一人で立ち上がることができず、なかまから手を引っ張って立ち上がっていた。



将校用水筒



はんごう
飯盒(将校用)



軍靴

将校と歩兵では、装備が違っていた。服装を見ると身分が分かる。移動手段も様々であった。馬に乗って移動する者、車に乗って移動する者、歩いて移動する者。

下級兵士とされた多くの若者は、たくさんの荷物を背負い、暑い中、寒い中、十分な食料もなく、泥道や山道を歩き通す。

はちまき 「神風」



1944年10月、レイテ島決戦で特攻機に乗る隊員が、「所持金不要、飛行機生産に役立ててほしい」と基地司令官に言い残し、出撃した。

そのお金は、靖国神社遊就館に納め、長官機密費で百三十万本の鉢巻を作った。

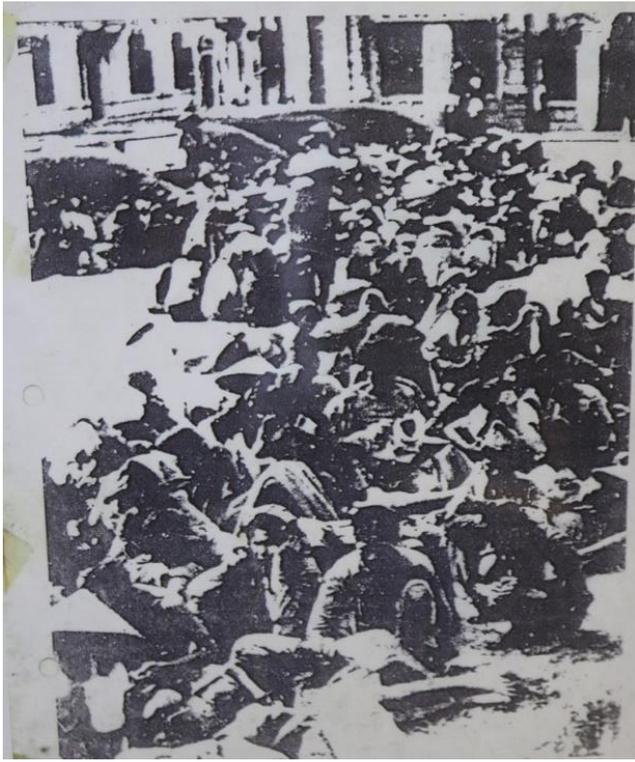
12月8日に全国で飛行機生産に従事する者、勤労奉仕の女学生にまでも由来書とともにハチマキを配布した。





付録の「すごろく」

子どもたちの遊びも、戦争一色に塗り替えられていった。日本がアジアへの侵略を進めていたことが、すごろくからも分かる。スタートは、日本→満州国→中華民国→インドシナ→タイ→ビルマ→インド→シンガポール→ジャワ→フィリピン→日本(上がり)となっている。自然豊かなアジアの国々、日本を歓迎しているアジアの人々という印象の絵でしあげられている。



↑ベトナム人二百万人が餓死。

アジアへ行った日本の兵隊は、日本から食料が届くわけではなく、その土地で食料を調達していた。その上、日本国内の食料不足を補うため、日本軍によって米が日本に送られていた。インドシナで暮らす人々は、食べるものがなく、多くの人々が命を奪われた。

↓国民総出で、資源確保に努めるように呼びかけるポスター。

全ての物資が不足し、鉄も燃料のガソリンも底をついていた。松の根から油を取り出すような状況であった。



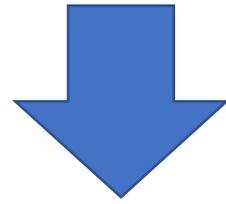


1943年2月23日、陸軍省が配布したポスター。3月10日の陸軍記念日を前にして5万枚も作られ、国内だけでなく、中国や南方の占領地にも配布された。敵国の旗を踏みつけた勇ましい姿、力強い眼差しの兵士。

ミッドウェー海戦以降負け続けている中で、戦意高揚を目的とした。「撃ちてし止まむ」の言葉が、盛んに使われるようになった。



千人針



強化された千人針

↓戦死者が増えると、千人針も「もっと効力のあるものを!」と、下のよう
に変わっていった。文字の中に玉止めをしてもらい、左に五
銭、右に十銭を縫いつけている。五銭は「死戦を越える」、十銭は
「苦戦を越える」という意味が込められている。



防毒マスク

当時も国際条約で毒ガス使用は禁止されていましたが日本軍は中国人に対しては使用しました。理由のひとつは、中国人が毒ガス兵器を持たず、同兵器による反撃を受ける心配がなかったからです。なお、米英軍には一度も使用していません弱いと見れば、容赦しない「皇軍」の野蛮さと言えます。

防毒面



↑この防毒面は、左のものより簡易な作りだった。周囲は布なので、毒を完全に防御することはできないと思われる。

←館内での説明。

第一次世界大戦で毒ガスが使われた反省から、国際条約でもう毒ガスは使わないと約束されていた。それにも関わらず、日本では秘密裏に広島県大久野島で製造され、実践で使われていた。

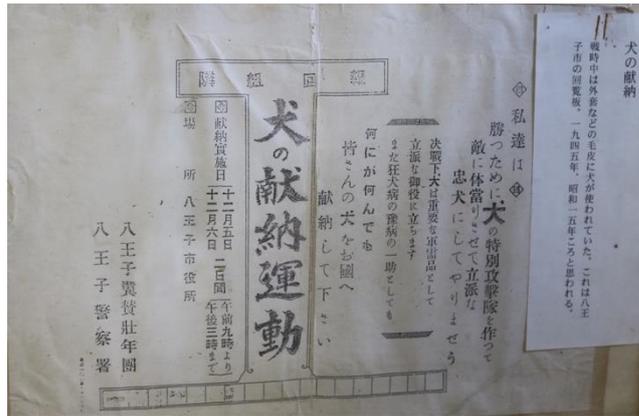
日の丸の旗 『武運長久』



周囲には、親しい人から励ましの言葉が書かれていた。

常に身につけて、持ち歩いていた。

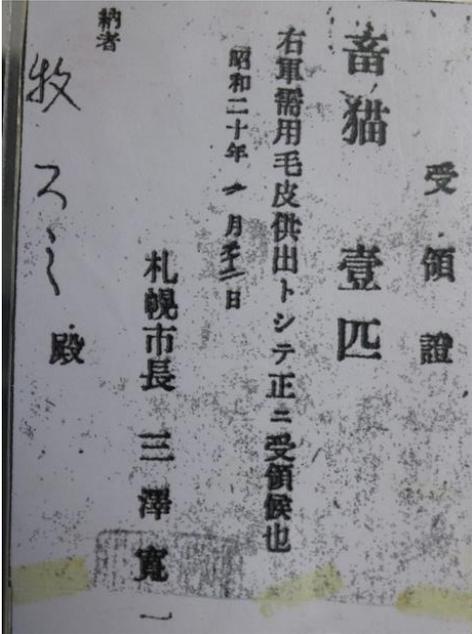
頭の上に置き、その上から鉄かぶとをかぶっていた人もいた。



↑八王子市の回覧板。戦時中は、飼っていた犬や猫も毛皮として回収された。戦時中は、町中から犬や猫の姿は消えた。

↓犬は十円、猫は五円などとして買い取られた。拒否することはできず、強制的に引き渡さねばならなかった。(供出)

犬や猫の毛で作られた防寒着(外套)





初代館長
武富登巳男さん

初代館長の武富登巳男さんは、いくつかのメッセージを残しています。その内容は自ら兵士として戦場に行き、体験した戦場の悲惨さを訴えるものにとどまらず、戦争と平和について示唆に富むものが数多くあります。

登巳男さんは「一切の戦争は人間のよこしまな心から起こります。そんなことをみんなの力で止めさせることです。みんなが気をつければ必ずできます」と訴えています。そして、平和であってほしいなら「戦争のことをよく勉強することが大切です」と説いています。

さらに「日本は平和です」といい、そのわけは「戦争をすることを禁じた憲法9条があるから」と強調しています。「この9条は日本だけでなく、世界の宝というべき大切なものです。憲法を永く守っていかなければなりません」とも述べています。

「戦争からは何も生まれない」とは、まさに先の大戦の経験者の心からの叫びであろう。「なぜ、このような悲惨が起きたのか、その原因はどこにあるのか、誰が引き起こしたのか、その後始末はどうなったのか、誰が責任を取ったのか」と問い、「実は全く責任がとられていないのがわが国」と断じています。そして、「戦争への真摯な反省が足りない。同じ過ちを繰り返してはいけない」と訴えるのです。

自衛隊の海外派兵や憲法改正など軍国主義への逆行を許してはならないという登巳男さんのメッセージを、私たちは今心に刻み込まなければいけません。

**戦争の真実を語り伝えることが、
子孫に残す私たちの遺言であると
信じる。**